

研究者と巡るセメント美術

美術史研究者 坂口英伸

No.14 神社の狛犬と獅子

本稿は紙面版の内容を踏襲したウェブ版オリジナル記事である。紙面にて「神社仏閣」として掲載した記事のうち、神社に関する記述をより発展させた内容である。前回の記事は寺院に建造された仏像が取材対象だったが、今回は神社に設置された狛犬と獅子へ目を転じよう。

木造一筋に発達してきた日本の寺院建築に、本格的にコンクリート造が導入されたのは1950年代後半からというから（横山秀哉『コンクリート造の寺院建築』彰国社、1977年）、歴史はそれほど長くはない。神社建築も同様で、1950年代がターニングポイントになるかもしれない。戦災で焼損した建築物の再建にあたり、易燃性の木造よりも不燃性の高いコンクリートへ関心が高まったためである。

実際に1950年代に入ると、鉄筋コンクリート造の拝殿や本殿に加え、セメント製の狛犬と獅子が登場する。金刀比羅宮鳥羽分社（三重県鳥羽市）のそれがその典型例である（図1）。本作は彫刻家の杉村尚（ひさし）による制作である。

金刀比羅宮（総本社は香川県琴平町）には、東京分社・尾張分社・鳥羽分社・神戸分社・出雲分社・松山分社の六分社があり、鳥羽分社は東海地方（特に伊勢志摩）の崇敬者の切なる願いにより、近鉄の支援も得て1956（昭和31）年に風光明媚な樋ノ山（標高約140m）へ奉斎された際に、本作も奉献されたのである。向かって右側に獅子、左側に狛犬が鎮座する。阿形（あぎょう＝口を開けた）獅子と吽形（うんぎょう＝口を閉じた）狛犬は、文字どおり「阿吽の呼吸」で神社を固く守護する。

大きさと迫力の点においては、鶴岡八幡宮（神奈川県鎌倉市）のそれは見ごたえがある（図2）。若宮大路の二の鳥居の前に鎮座する狛犬と獅子である。作者は彫刻家の山脇正邦。原材料の白色セメントは、当時の小野田セメント株式会社が提供した。獅子の台座に設置された銘板には「山脇正邦作 小野田白色セメント使用」と刻まれる。本作は1961（昭和36）年12月8日に、同社が鶴岡八幡宮へ寄贈した。

太平洋セメント株式会社には、本作を撮影した紙焼写真が残されており、山脇はアトリエにて右手に金槌をしっかりと握りしめている。山脇は小野田セメントが協賛した野外彫刻展にセメント彫刻を出品した常連でもあり、同展の担当で山脇とも親しい関係だった南壽敏夫氏は、「獅子と狛犬を作る際には、その重量で新築の山脇邸の床が抜け落ちてしまった」と、当時を懐かしんで筆者に話してくれた。設置から約21年を経た1982（昭和57）年、廣浦富士株式会社が洗浄と防水の工事を実施し、本作はリフレッシュされた姿でよみがえった。

宗教施設のセメント彫刻と一口にいても、仏教と神道の間には作品の傾向や数などの点において際立った相違点がある。神道におけるセメント製の作品数は、仏教に比べれば圧倒的に少ない。というのも、神道では、基本的には尊い存在の偶像化が避けられてきたからである。これに対して仏教は、偶像を積極的に用いて普及をはかってきた経緯がある。仏教伝来より江戸時代まで、仏教と神道は混交してきたこともあり、仏教の影響により神像が作られることがあったものの、その数は総じて少ない。

狛犬と獅子は石像が圧倒的に多いため、セメント製の狛犬と獅子は石像と勘違いされ、見落とされがちである。神社や仏閣を訪れた際に、彫刻作品や梵鐘などに目を向けてみるのも、また違った楽しみであろう。



図1 金刀比羅宮鳥羽分社の獅子と狛犬

画像提供：太平洋セメント株式会社



図 2 鶴岡八幡宮の狛犬と獅子